

信 毎 歌 壇

米川 千嘉子 選

遺き口に伯母会してし出合いの場ひと限りの林橋
花摘み (坂城町) 柄沢 満則
トラクタの音響かせて始まれる野菜作りの仲間ほ
ライバル (佐久市) 荻原多美子
四月なるラジオ番組不登校の子をもつ母の涙で始
まる (松本市) 近藤ひろ子
オダマキや亡き義姉さんからもらひし苗空き屋の
実家では満開ならん (小諸市) 尾沼美枝子
代挿きの泥の体を拭いつつ外風呂われに焚きくれ
し母 (千曲市) たじまたける
カラオケで「フライト」とさげび歌つとき忘れら
れないいくつかの顔 (安曇野市) 細川 恒
五人の子残して母は若く逝き泣く子等なため父は
泣かざり (安曇野市) 石田 美紀
兄逝きて納骨の墓覗き母が父母に会えたり悲しみ
の中 (安曇野市) 吉口 広子
今更たら最高なるつといふ眠気なせか夜来す息だ
けに来る (小川村) 伊藤 宗善
餌に来るメジロのすがた絶えにけり花前線を迎え
に発ちて (小諸市) 星野 直人

佳作
亡き母の残しし歌を読みおれは医者疎む父に手を
やく歌あり (駒ヶ根市) 塩沢 春子
階段を昇った先のスナックで取っおいたと竹の
子汁出る (小川村) 久田 肇

第一首、美味しい林檎のための摘花作業がひそかな出会いの場所として用意されたのだろう。花ざかりの林檎畑の風景がいっそう美しい。第二首、農家のそれぞれに新しい一年が始まる。下旬に勢いがある。第三首、「不登校の子」の母にとっての四月の苦しさがラジオからこぼれてくる。第四首、自宅の庭のオダマキを見つ、実家の今を思う。花や義姉の存在感が確かなところに魅力がある。

小池 光 選

うぐいすのひと鳴き母に聴かせたく病室の窓少し
開け待つ (東御市) 沢田 司
生涯をこの地と定め断崖にゆるぎなく立つ巨き樫
の木 (木祖村) 佐々木千代子
ペランダの洗濯物が風に揺れ「乾け、乾け」と身
をよじる春 (東御市) 丸山 タロ
「そういうやつなんだよあいつは」小四の息子が
知ったような口利く (松本市) 堀内 悠子
幹の股に相まれし鳥の巣の枝のはじめのひとは
いかに置きけん (長野市) 原田 浩生
四季ごとこの花育てた娘の家庭もともに重地と
なりぬ (松本市) 興 絹枝
菜の花を湯がいて一人酒酌めば冬を越したる喜び
の湧く (松川村) 岡 豊村
亡き娘とは約束のみにひとたびも旅せぬ事か今は
切なし (小諸市) 篠原 昭枝
一人居の親友亡き庭に咲いている何を告げるか白
い木蓮 (長野市) 若月 房子
金髪の孫に驚きヨーグルト飲ませて暮しのあれこ
れと聞く (小海町) 依田 久代

佳作
すれ違い「ようやくですね」お互いに春を確かめ
散歩仲間ほ (長野市) 渡辺 和代
木もて裂けるスポンやだぼたぼなスポンのあり
て思春期はすぐ (上田市) 竹内 創造

第一首、こころ優しい歌。病室の窓を少しだけ開けるといことが謙虚でいい。うぐいすの声はきっとベッドの母に聞こえただろう。第二首、断崖にしっかりと立っているおおきな樫の木。こころ

小島 なお 選

覚えてるすべて忘れてしまっても鬱と呼んだ方
ワセミの青 (塩尻市) 可能レーベル
玄関の花瓶の梅の花びらがホロリホロリと金魚の
中へ (佐久市) 水間壽美子
管つかう外国人見て外国人が笑って通る回覧券司
の屋 (木祖村) 佐々木千代子
気が付けば春は眠けだす霜焼けのカサフタ見えぬ
耳の縁から (南箕輪村) 堀沢 豪
奈良県は大阪隣と教える鹿は大阪府民となりぬ
アンテナの端にとまりし三月の日さしにさうり
静止画の鳩 (松本市) 中村 博穂
「黄色だよ」妻の言ひしを待ちきれずチューリッ
プの膏開きたる孫 (飯田市) 矢崎 俊一
蛇の皮脱きたることく顔を出し真緑の葉のゴムと
なりたる (長野市) 渡辺 和代
避けようと右へ左へ足早にいつも捕まるセンサー
ライト (長野市) 中村 傳子
廃校の金次郎像新校へその人物を児童は知らず
(御代田町) 柳沢 光雄

佳作
川魚臭くて旨い鰻かじり春に一礼水菜のおひたし
求めるものすべて買い得てスパーを出すれば弥
生の夕べ明るし (松本市) 近藤ひろ子

訪日外国人が増えるほど、日本への馴染み具合もさまざま。変わりゆく日本の景色。第四首、気付かないようなひそかな場所にはじまり、いつの間にかどんどん加速する春。カ行の軽やかな音感。

第一首、肉声の間こえてくるような初句切れの呼吸。記憶の底に仕舞われて煙めくカワセミの青。第二首、水面に浮かぶ梅の花びらを見上げた金魚はささやかな春の訪れを知るのだろうか。第三首、